

書評

楊枝嗣朗著

『貨幣と国家 資本主義的信用貨幣制度の生成と展開』

(文真堂 2022年刊)

小畑二郎

はじめに

本書は、楊枝氏の長年の経済史研究をふまえて、貨幣と国家との間に結ばれてきた密接な関係について、様々な角度から究明した力作である。

国家の経済政策と貨幣との関係については、長年にわたる係争問題であり、また近年の「現代貨幣論 (MMT)」もその中心問題としてきたような重要なテーマであり続けてきた。このような係争問題に関して、本書は、経済史のみならず、現代の経済政策について関心を持つ幅広い読者にとって、大変興味深く示唆に富む論点を提供している。また、評者は、本書のみならず氏の他の著書からも、ケインズ『貨幣論』を読み直すための重要な示唆を与えられた。そこで、本書の概要について紹介するとともに、評者が本書から学んだ重要な論点について整理してみたい。

1. 本書の序論

序論において楊枝氏は、計算貨幣としての貨

幣の標準価値を定め、その価値を安定させるために国家が果たす重要な役割について論じている。このような論点は、『貨幣論』における国家貨幣に関するケインズの評価とも合致する。また同時に、戦後日本における岡橋一河合論争に対する注釈にもなっている。岡橋一河合論争の結論は、法定不換紙幣をも銀行貨幣と同じく一種の信用貨幣として理解しなければならないとするものであった。このような結論は、氏によれば、計算貨幣の標準的価値を確定する際の国家の役割を不当に軽視するものであった。

これに対して、ケインズは、『貨幣論』において国家貨幣と銀行貨幣とを区別し、国家貨幣の中に計算貨幣の役割の起源を求めていた。すなわち、国家の重要な任務 (Agenda) の一つは、度量衡の制定とともに、国家に対する国民の租税債務を確定するための計算単位を定めることにあった。また、そのことに付随して、貨幣は国民同士の債権・債務額を確定する役割を果たす。計算貨幣としての貨幣の起源は、このような国家の重要な任務の中に求められる。したがって、国家貨幣の中にこそ、貨幣の本来の起源を求めるべきであり、銀行 (信用) 貨幣は、国家貨幣による債務の承認に基づいて、市

場経済の発展につれて、国家貨幣の存在を前提にして発展したものであった。

以上のような貨幣史観は、スミスやマルクスなどの古典的な貨幣信用論よりも、むしろケインズの『貨幣論』の見解に近いものであった。また、貨幣の起源を市場過程からの自生的発展に求めるオーストリア学派の貨幣論よりも、クナップ(Knapp)の『貨幣国定論』の見解に近いものである。楊枝氏は、本書において、以上のような国家貨幣および銀行貨幣に関する見解を表明する。このような本書の貨幣史観は、従来の古典的な銀行信用論を脱却して、現代的な貨幣論へと移行するための確信を読者に与えてくれる。

2. 本書の内容

第1章「L.R. レイの現代貨幣理論 (MMT) への疑問」

第1章において、楊枝氏は、まず、ケインズの「古代通貨草稿」について言及し、BC. 6~7世紀のリディアの世界最古の鑄造貨幣によってではなく、それよりもっと早いBC.18世紀頃の古代バビロニアにおいて、重量標準とともに計算貨幣の標準が制定されたことをもって、ケインズが貨幣の起源としていたことを高く評価している。すなわち、小麦粒や大麦粒の重さを測るムナやミナといった重量基準の制定に付随して、計算貨幣の単位が国家によって制定され、その基準にしたがって高い利率のつけられた債務が測定される仕組みが定着していった。このように、貨幣の起源は、市場取引を仲介するための金属貨幣(鑄貨)の中ではなく、債務の確定のために利用される計算貨幣の中にこそ求められる。

レイは、このような国家貨幣の起源に適合す

るような現代貨幣論を展開しているが、楊枝氏によれば、国家貨幣の役割を過大に評価し、銀行貨幣の役割を軽視している。国家による債務の測定に前後して、銀行の預金債務の承認に基づいて銀行貨幣が利用されるようになったが、現代の国家貨幣である法定不換紙幣でさえ、銀行貨幣の普及なしには、貨幣制度の中核を占めるまでには至らなかったであろう。現代貨幣論(MMT)は、国家貨幣も銀行貨幣と同じく、国民の信用によって支えられていることを銘記しない点で不十分である。貨幣は、単なる法制度や国家政策の人為的な創造物ではないのである。

第2章「為替手形・預金通貨・銀行券—インガムの資本主義的信用貨幣論への疑問」

第2章において、今度は、銀行貨幣の発展過程について論じられている。銀行貨幣は、銀行の一覧払債務の貸し付けから発展した。これまでの古典的な貨幣論によれば、市場交換のための交換手段としての鑄造貨幣(金貨、銀貨、銅貨など)による取引費用を節約するための商業信用や銀行信用(銀行券発行)から銀行貨幣が発展したものと理解されてきた。このような古典的な貨幣史観に対して、楊枝氏は、世界的な支払い決済システムを仲介する預金通貨、すなわち銀行預金に基づく振り替え決済システムの世界的な発展に基づいて、銀行の信用創造機能が発展したことを跡付けている。世界的な多角的な決済システムを基礎とした一覧払貸付による預金通貨の創造こそ銀行貨幣の本来の役割であった。このような多角的決済システムを基礎とする銀行機能の発展に関する貨幣史観は、ケインズが国際的な多角的決済システム(international multi-lateral clearing system)に基づいて国際通貨同盟を築きあげようとした貨幣史観

にも合致する。ケインズの国際的な多角的決済同盟の構想は、第2次大戦後のIMFの設立の中に部分的に実現された。

このような世界的な支払い決済システムに関する理解は、楊枝氏の大著『イギリス信用貨幣史研究』九州大学出版会（1982年）においてすでに示されていた。これによれば、銀行貨幣の発展の歴史は、アントワープにおける持参人払の債務証券などによって確証されている。また、イングランドの金匠銀行 Backwell の帳簿の中に氏が発見したヨーロッパ全体に広範に張りめぐらされた国際的決済ネットワークによっても裏付けられている。

第3章「為替手形と初期預金銀行の歴史的意義」

ここでは、預金振替銀行における信用創造が中世から近代にかけて、ヨーロッパを中心とする世界的規模において発展していたことが述べられている。中世末期から近世初頭にかけて発展した遠隔地貿易やヨーロッパ各地における定期市取引、さらにマーチャント・バンクによる外国為替取引などが振替銀行業務を進展させ、そのことが為替手形の流通を盛んにする中世期末の「金融革新」を生んだ。

第4章「貨幣の世界システム」の成立

この章では、とりわけ古典的な貨幣史観に対する著者の批判が強く押し出されている。著者が批判する古典的な貨幣史観の誤りは、次の2点に要約される。第1点は、17世紀以前のヨーロッパにおける金融発展が、前近代的な遅れた特徴を持つものであって、近代的な銀行制度

は、そのような前近代性を払拭することによって発展したという俗説に対する批判である。また第2に、19世紀の銀行の発展が産業資本による産業革命（工業化）のための資金を提供するために促進されたものであるという俗説に対しても批判されている。

これらの俗説に対して、第1に17世紀までには、すでに世界的規模の信用ネットワークが形成されていたことが述べられている。この点に関して、著者は、Royal Bank of Scotland のロンドン支店の地下室に保管されていた金匠銀行 Backwell の元帳の中に為替取引の世界的なネットワークが明らかにされていたことを発見した。このような発見が、氏のその後の貨幣史観の大きな転換を促した。16-17世紀のヨーロッパの金融システムは、決して前近代的な遅れたものではなく、近代の銀行システムと決して見劣りしないばかりか、国境を越えて私的決済のネットワークが張り巡らされていた点で、かえって現代よりも進んだ決済機能さえ備えていたといってもよい。

さらに第2に、19世紀イギリスの金融システムが産業の資金調達のために創造されたという俗説は、氏によれば、全く事実と反するものであった。イギリスの産業発展は、それに先行したマーチャント・バンクなどによる商業金融なしには成立しなかった。しかも、18世紀末から19世紀初頭にかけてイギリスの産業革命は、むしろ国家による産業に対する金融的な締め出しの中で進められたものであった。このような産業革命のなぞに関連して、評者は、18世紀のスコットランドの銀行業務の発展が産業革命に果たした役割について究明してみたい¹。

1 この点に関する示唆は、たとえば Carles P. Kindleberger, 1985, 1986, *Keynesianism vs. Monetarism and Other Essays in Financial History*, London: George Allen & Unwin, pp.11-24. の中にある。

第5章「貨幣と国家——近代イギリスの事例に寄せて」

第5章は、この本の題名にされた最も重要な章である。ここで、著者は、近代の銀行制度と銀行貨幣の発展が国家のような権威的な基礎なしには安定的に発展しなかったことを述べている。例えば、小切手や銀行券の流通、および私的債権・債務関係の清算のためにさえ、法律による、または、裁判所による裁定が最終的な決め手になることを考えれば、貨幣経済における国家の果たす役割は明らかである。

もっとも典型的な国家と貨幣の関係は、1694年のイングランド銀行の創立の際に現れた。膨大な戦争金融を賄わなければならなかった初期の近代国家は、その頃、頂点に達していた銀行信用市場の拡大を利用して必要資金を調達した。イングランド銀行は120万ポンドの政府貸し付けに対して、6%の法定最高金利を上回る8%の利子と4000ポンドの運用交付金を与えられ、さらに国家による強制通用力のついたイングランド銀行券を発行する特許を得た。この銀行券は、イングランド銀行の一覧払債務というよりも、ほとんど現金に近い機能を果たした。現代の現金貨幣の太宗を占める中央銀行券は、同時に国家貨幣としての役割を兼ねている。このような点を踏まえるならば、イングランド銀行を中心に発展を遂げたイギリスの金融システムは、国家による貨幣制度に対する強い干渉によって支えられてきたことは明らかである。

第6章「国家は信用貨幣を廃止できるのか——新通貨学派の信用貨幣批判に寄せて」

最後の章は、銀行の信用創造機能が金融市場の不安定要因であるという認識のもとに、国家貨幣に一元化する貨幣制度を推奨する「新通貨

学派」と称する人々の見解を批判することに費やされている。著者は、一方で国家と貨幣との強い関係を指摘するが、他方で銀行貨幣の重要な役割について言及することも忘れない。また民間の銀行貨幣を廃止して国家貨幣だけを流通させることを主張する論調に対しても批判する。国家貨幣は、銀行の決済機能に基づく信用制度の発展に支えられて初めて十分に機能することができるのである。

3. ケインズ『貨幣論』と本書との関係

評者は、本書からケインズ『貨幣論』に関する新たな読み方、すなわち「経済史の理論」として同書を読み直すという示唆を受けたので、最後にそのことに関して述べてみたい。ケインズは、『貨幣論』の執筆とほぼ同じ時期に古代通貨に関する草稿（『古代通貨草稿』『ケインズ全集』第28巻所収）を書き留めていた。この草稿は、ケインズの生前には公表されなかったためもあって、ケインズの『貨幣論』と特別の関係があるとは、一般に認識されてこなかった。しかし、貨幣の起源とその本質が「計算貨幣」にあるというケインズの歴史的洞察は、貨幣の分類だけでなく、『貨幣論』全体の「導きの糸」となっていた。それは旧来の金本位制や貨幣数量説に対する批判、また社会会計式としての基本方程式、さらに国際的な銀行による多角的清算システムを導入するための理論的な支柱になっていたのである。楊枝氏の研究は、このような歴史的洞察へと評者を導いてくれたので、最後に謝意を表したい。

（筑波大学・立正大学名誉教授）